慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古版経済書解題 一千八百十一年版ディ・ ボアロー著 経済学学習の手引
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1942
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.36, No.9 (1942. 9) ,p.791(69)- 798(76)
JaLC DOI	10.14991/001.19420901-0069
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19420901-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『國富論』公刊直後に於いて、經濟學の成立へのスミス以前の時事論者の役割と、これに對して體系を與へたスミスのこの學問への貢献をかやうに明確に說く筆者の批評は、寔に聽くべきものがある。何びとの筆に成るものか明かでないが、以下數號―六、七、八月號 for June, July, August―に亘つて紹介される『國富論』の概要とは、筆者のこの學問に對する理解の深さを想はせるものがある。或はまた本文に述べたやうな「短い獨立の文言で表はされた全體の要旨」への欲求（ヒュー・ブレエア）に應ずるものと見ていいかも知れない。

古版經濟書解題

一千八百十一年版ディ・ボアロー著『經濟學學習の手引』

高橋誠一郎

一

ディ・ボアロー（D. Boileau）と名乘る人の『經濟學學習の手引』（An Introduction to the Study of Political Economy: or, elementary view of the manner in which the Wealth of Nations is produced, increased, distributed, and consumed.）が倫敦で出版せられたのは一千八百十一年のことであつた。出版者は父の代からサー・ジェームズ・スチュアートの『經濟原理』や、アダム・スミスの『國富論』など經濟學界の名著を發賣してゐるストランドのティー・カデル（T. Cadell）と、グブルユー・デーヴィス（W. Davies）である。

著者ボアローが如何なる生涯を送つた人であるか、私には今の處、全く之れを知るの便がない。手近かの人名辭書や經濟學辭典には全然彼れの名を看出し得ない。唯だ僅かに一千八百十一年七月一日に草せられた著者の序文に據つて、彼れが歸化人であること、彼れが既に一千八百〇七年倫敦のコールバーン（H. Colburn）書店から統計學に關する著作 Essay on the Study of Statistics を出版して居ること、彼れが本書出版の頃にはブロンプタン街に

居住して居つたこと等を知り得るに過ぎない。

經濟學史の著者にして彼れの名を掲げてゐる者は甚だ少ないやうであるが、而も、彼れの著書は、經濟學區分法の成立を論ずるに當つて時折引用せられることがある。即ち、經濟學の傳統的區分法たる生產論、分配論及び消費論の三部門が其の成立を見たのは、普通ジャン・バティスト・セイの『經濟學』（Traité d'Economie Politique.）の再版に於いてであると看做されてゐるのであるが、（一千八百〇三年の初版に於いては別樣の區分法が採用せれらてゐる）、此の再版の公せられた一千八百十四年に先き立つ三年、ボアローは前掲書中に於いて、凡そ三分法を採用し、其の全篇を第一編「國富の本質及び起原」、第二編「國富の增加」、第三編「國富の分配に就いて」、第四編「國富の消費」に分割してゐるが爲めである。（昭和十二年版拙著『經濟學史』上卷四一二—四一四頁參照）。

ホイッグ黨代議士フランシス・ホーナァ（Francis Horner）の動議に基き、金地金の高價の原因を調査するが爲めに、一千八百十年二月十九日、議會によつて任命せられた地金委員會（the Select Commitee of the House of Commons on the High Price of Gold Bullion）の報告書は同年六月八日、印刷に付せらる可きことを命ぜられた。此の『地金委員會報告書』（Report together with minutes of evidence and accounts, from the Select Committee to inquire into the Causes of the High Price of Bullion, and to take into consideration the state of circulating medium and of exchange between Great Britain and foreign parts.）の上に現れた甚しい意見の不一致は、ボアローをして經濟學の眞原理が此の國に於いて理解せらるゝこと極めて尠きの歎を深からしめたのである。然しながら、這般の論爭によつて喚起せられた非常なる一般の興味は又、彼れをして此の學問を普及せしめんとするの學が全然江湖の嘉納に値せざるものに非ずと做すの希望を抱き得るものと思惟せしめたのである。（p. iii.）。

AN
INTRODUCTION
TO
THE STUDY
OF
POLITICAL ECONOMY:
OR,
ELEMENTARY VIEW OF THE MANNER
IN WHICH THE
WEALTH OF NATIONS
IS PRODUCED, INCREASED, DISTRIBUTED,
AND CONSUMED.

BY
T. BOILEAU,

LONDON:
PRINTED FOR T. CADELL AND W. DAVIES,
IN THE STRAND.
1804.

二

此の書は半ばはハレ大學教授ルートヴィヒ・ハインリッヒ・フォン・ヤーコップ（Ludwig Heinrich von Jakob）が獨逸諸大學の教科書として著した『國民經濟學の諸原理』（Grundsätze der Nationalökonomie oder Theorie des Nationalreichtums.）に基き、又半ばは彼れ自身の附加せるノートに據つて撰述せられたものである。アダム・スミスは當時既に獨逸内に一學派を創設しつゝあつたのである。彼れはカントが哲學上に於いて占むることの出來た地位を經濟學上に於いて占むるに至つた。『國富論』の影響は先づゲオルク・サルトリウス（Georg Sartorius）、アウグスト・フェルディナント・リューダー（August Ferdinand Lueder）、及びクリスティアン・ヤーコップ・クラウス（Christian Jacob Kraus）、の著書中に反映せられたのであるが、其の後を承けて、ゴットリープ・フッフェランド（Gottlieb Hufeland）、ユーリウス・フォン・ゾーデン（Graph Julius von Soden）、レーオポルト・クルーク（Leopold Krug）、及びヨハン・フリートリッヒ・オイゼビオス・ロッツ（Johann Friedrich Eusebius Lotz）等と等しくヤーコップはスミスの傳統を承認しながらも、之れに重要なる修正を加へ、更らに獨立なる解析を試みるに至つた。第十九世紀の初期以來、此の國に於ける經濟學説の發達は根本的には依然英國に依存せるものであつたが、而も、そは又、自國の哲學、殊にカントの其れから幾分の影響を與へられなければならなかつた。カント及びスミスの學徒であつたヤーコップは兩者の理論を結合せんことを企圖した。彼れは經濟的自由主義の原理を承認したのであるが、而も、カントと共に、倫理的考察を首位に置かんことを主張し、而して國家に對して社會發達を促進する上に於いて更らに積極的なる任務を割り當てたのである。彼れは自由貿易原理の相對性を認識し、斯くて又後年に於けるフリートリッヒ・リストの段階説を豫示したのである。

ヤーコップの著を底本となし之れに修正を加へたポアローは、經濟學（Political Economy）を其の最廣の意義に解し一國民中に最大なる幸福の總高を生ず可く最も善く工夫せられた手段に關する知識と觀ずして、其の更らに限定せられたる意義、即ち獨逸人が輓近之れを呼び始めた國民經濟學の意味に解し、是れを以つて豐富なる國民的所得を備ふるの手段を探求するものと做してゐる。（pp. viii-ix.）。國民的所得（national income）とは、一國民の各箇成員の滿足の手段即ち其の欲望を充すの手段の總體である。這般の所得が其の國民の實際の經費以上に出でた餘剩が一國民の富（the wealth of a nation）を構成する。「經濟學」は諸國民が最も善く彼れ等自身に對して充分なる所得を與ふるを得せしめらるゝ手段に關する知識である。そは專ら諸國民の富の本質及び原因に關するものである。ロック、バークリィ監督、デーヴィッド・ヒューム、サー・ジェームズ・スチュアート及び其の他英國に經濟學の第一原理を弘めた人々は是れ等のものを政事、治安及び財政に關する諸事項と混合して居つた。諸國民の富の本質及び原因がアダム・スミスの不朽の著中に於いて充分に且つ巧妙に表顯せられたのは漸く一千七百七十六年のことであつた。著者は、スミスの著を以つて、政治學から遠ざかつた最初の經濟學の論篇であり、又、國民的所得及び國民的經費が國家の收入及び支出から周到に區別せられた最初のものであると做してゐる。（p. 2.）。ポアローは自著がスミスの大著に對する有用なる手引たるの定評を得るならば、其の野心は充分に滿足せしめらる可きものであると稱してゐる。（p. ix）。

三

ポアローが其の著を四篇に分ち、略々三分法を採用せることは前述の如くであるが、而も、經濟學の古典的區分法は未だ彼れに於いては完成の域に到達せざりしが如くである。即ち、彼れは「富の生産」の同義語と看做さるゝ

「富の起原」を論ずる第一編中に於いて、「價値」、「交換の一般的媒介物」、「價格」、「勞働の賃銀」、「資本の利潤」、「地代」、「價格の諸要素が貨物の價格を規制する割合」、「貨物の價格に及ぼす國家の影響」、「高價及び廉價」等を論じ、而して第三編分配論中に於いて「流通」、「眞實の貨幣、即ち鑄貨」、「信用」、「鑄貨に於いて支拂ふを避くるの手段に就いて」、「低廉なる鑄貨代用物」等を取り扱つてゐる。セイの三分法はボアローによつて先鞭を着けられてゐるが如くであるが、而も、彼れの『經濟學』が一千八百〇三年の初版以來 Simple exposition de la manière dont se forment, se distribuent, et se consomment les richesses. の副題を附せられ、而して、ボアローの著が Elementary view to the manner in which the wealth of nations is produced, increased, distributed, and consumed. なる副題を有するに徴しても、後者が前者によつて示唆せられる所のあつたことを推定することが出來ると思ふ。要するに、ボアローの任務は、獨佛大陸學者によつて改修せられ秩序立てられたアダム・スミス經濟學を更らに英國に招來するに存して居つたのである。

ヤーコップは、任意に增加し得る財貨と然らざるものとの相違を指摘し、任意に增加し得ざる財貨の市場價格は、其の數量が全然自由意志によつて決定せらるゝ商品の市場價格よりも費用價格を離れ得ることが更らに容易であり、更らに永續的なることを認めて居つた。(Grundsätze der Nationalökonomie, a. a. O., 1805, I. Hauptstück, 3. Abschnitt, §. 203.)。斯くの如き思想は其の後、デーヴィッド・リカードオに於いて、更らに鋭利なる說明者を看出すに至つた。ルードルッフ・カウラ博士 (Dr. Rudolf Kaulla) は、リカードオが或ひは此の點に於いてボアローを通じてヤーコップの影響を受けて居つたかも知れぬと觀てゐる。(Die Geschichtliche Entwicklung der Modernen Werttheorien, 1906, S. 206-207.)。ボアローは、其の著の第一編第十章に於いて價格を論じ、其の數量が人間の自由意志によつて決定せられる物品の市場價格よりも、生產せらる可き數量を蓋然的需要に適合せしめることの出來ぬ物品の市場價格は、更らに屢々、又更らに長き期間に亙つて、費用價格から離れることある可きを說いて居つた。(pp. 88-89.)。

四

チュルゴオは夙に「富の分配」なる語を其の著の表題中に揭げ、(Réflexions sur la formation et la distribution des richesses, 1766.)、アダム・スミスは其の著第一編に於いて「勞働の收益が人民の種々なる階級の間に自然に分配せらるゝ順序に就いて」述べ、(Wealth of Nations, vol. I, p. 5.)、而してセイは前述の如く、其の著の副題中に富が如何に分配せらるゝやの語を加へたのであるが、ボアローは今や其の著の第三編の題目を「諸國民の富の分配に就いて」と明記した。彼れは言ふ、一國內に於いて生育せしめられ若しくは製造せらるゝ貨物の總體は其の所得を構成すると。而して、大多數の產物又は貨物は個人の聯合せる努力の收益であるから、共同生產者の各々は其の產物の價値の配分に對する權利を與へられてゐる。彼れが其の貨物の生產に協力するのは這般の配分の爲めである。這箇生產に於ける協力者の間に於ける收益の分配は國民的所得の本原的分配 (primitive distribution) を構成する。生產者等が總べて彼れ等の相當なる配分を收受した時には、彼れ等は自ら各自の分前を消費するか、人格的勤務に酬いるが爲めに是れ等のものを使用するか、是れ等のものを讓與するか、若しくは是れ等のものを他の有用なる產物と交換するかの孰れかである。斯くの如きは派生的又は第二次的分配 (derivative or secondary distribution) である。そは流通 (circulation) と呼ばるゝ所のものによつて遂行せられる。(p. 269.)。

セイは國民的配分の三要素たる勤勞所得、資本所得及び土地所得に對して豫め生產基本を勤勞、資本及び自然的

能因特に土地に分つたのであるが、(Traité d'économie politique, tome I, 1803, Livre Premier, chap. i-v.)、ボアローは更らに明確に其の生産論中に於いて、「富の泉源として考察せられたる土地」、「勞働」、「資本」及び「土地、勞働及び資本の聯合作用」に就いて述べ、(Bk I, chaps. iii-vi.)、次いで、人格的勤務及び政治的制度、價値、交換の一般的媒介物、並びに價格を論じたる後に於いて、「勞働の賃銀」、「資本の利潤」及び「地代」に就いて說いてゐる。(Bk I, chaps. xi-xiii.)。而して、彼れは第三編分配論に入つて、國民的所得の最初の分配に於ける相伴者、全收益が生産に於ける協力者等の間に分配せらるゝ割合、並びに最も有利なる本原的分配に就いて述べる。(Bk III, chaps ii-iv.)。

ボアローは、第四編消費論に於いては、セイ以來の傳統を繼いで、「消費するは物の效用又は價値を全部若しくは一部破壞するに在る。そは或る物に價値を與へつゝある生産の反對である」と說き、(p. 341.)、「公消費」及び「公消費の泉源」等に於いて財政論に說き及んでゐる。財政的論述は又第二編末に於いても看出される。

ヤーコッブの書の「修正」(Ueberarbeitung) たる本書は、多くの影響を英國經濟學界に與へることなくして、何時しか「殆んど忘れ去られた著作」(an almost forgotten work) となつて了つたのである。(Kaulla, a. a. O., S. 207; Edwin Cannan, A History of the Theories of Production and Distribution in English Political Economy from 1776 to 1848, p. 183.)。英國經濟學は猶ほ長く獨逸經濟學から重要なる影響を與へられることなくして過ぎたのである。

板垣與一氏「政治經濟學の方法」

氣賀健三

現代の我が國は强烈なる實踐的意欲に滿ちたる知性を要求してゐる。

然るに從來の理論經濟學に於ける存在と當爲の論理的分離は、その經濟理論から實踐的性格を奪ひ去る如くに見えた。今日の我が國やドイツに於て有力となりつゝあるゴットル流の經濟思想は再び科學的客觀性の名において實踐的なる理論を建設せんとするものであつて、いはゆる政治經濟學的思潮は即ちその一つに外ならない。

然るにかゝる企だては、從來の經濟理論的思惟の立場に立つ限り成功せざるものとされ、考へ方それ自體、學問觀それ自體を根本的に變へなければならないといふ出發點から出直すことを必要とした。

この樣な根本的要求から新しい經濟學を確立する眞劍な努力の結晶を我々はわが國においては既に酒枝義旗氏の「構成體論的經濟學」(昭和十六年)に見る。此書に於て氏はゴットルの本旨に則り、氏自身の眞劍な體驗反省を通じて新しき學問への荊の道をきり拓かれた。私は嘗て本誌に於て同書の短評を試みたが、其際にも記しておいた如く、價値判斷に關して必ずしも滿足し得なかつた。端的にいへば構成體それ自體の是認の中に、その現實的な正しさを前以て豫定してかゝつてゐる感を受けたのである。併し此書物によつて我々がゴットル的思惟の核心を知り得たの